

## 在宅医療の土台を支える研究の推進を目指して

# 1. 在宅医療の研究に関する展望—日本在宅医学会研究委員会における取り組み—

Perspectives for home care research: An approach by Committee for Research of Japanese Academy of Home Care Physicians

山中 崇

## 要約

日本在宅医学会研究委員会では、研究マインドの醸成および研究への取り組みを奨励することを目指し、会員に対して在宅医療に関する英文論文の紹介、研究ワークショップを開催している。また、研究を発展させる基盤作りおよび多施設共同研究への展開に向けた活動として、日本在宅医学会大会演題をモニタリングすることにより研究シーズの見出しに努め、日本老年医学会研究委員会と合同委員会を開催し、在宅医療のデータベース構築に向けた議論を行った。

**Key words** 在宅医療, 研究, 日本在宅医学会

(日老医誌 2016; 53: 19-24)

## 日本在宅医学会の沿革と活動の理念

「在宅医学を確立しよう」という佐藤智先生の呼びかけに全国で在宅医療を始めた医師たちが集い、1994年に日本在宅医学会の前身となる「在宅医療を推進する医師の会」が発足した。在宅医療を「客観的根拠に基づく医療 (Evidence-based Medicine)」とし、多くの医師が在宅医療を学ぶことができる場にするため、「在宅医療を推進する医師の会」を母体として1999年に「日本在宅医学会」が設立した。

2002年に専門医制度が発足し、2005年度から経過措置による認定を開始。2008年より研修プログラムの認定が始まり、2009年4月からこれら全国の研修プログラムで在宅医療専門医研修が行われている。現

在会員数は約2,200名（そのうち医師からなる正会員数は約1,800名）。2012年4月1日より一般社団法人化されている。

在宅医療に関わる多くの人の理念・知識・経験を集積し、外来診療や病院等の施設内医療とは異なる「原理 (Principle)」を確立し、在宅医学を構築すること、在宅医が集い、在宅医療の Science と Art をともに研鑽し、在宅医療を Interesting で Exciting と感じる医師・医療者を育成することが、在宅で療養する方々とそのご家族の“生活の質”の向上に寄与するという考えに基づいて活動している。

表1 日本在宅医学会雑誌に掲載された種類別論文数（2009年7月～2015年1月）

年/月	巻	号	原著論文	報告	短報	症例報告	総説	特集	大会報告
2009/7	11	1							第11回大会
2010/1	11	2	1	2		3	1	2	
2010/8	12	1		2		1			第12回大会
2011/2	12	2		2		1		1	
2011/7	13	1			1				第13回大会
2012/1	13	2	1			1		1	
2012/8	14	1							第14回大会
2012/12	14	2			1			1	
2013/7	15	1	1		2				第15回大会
2013/12	15	2	2	1				1	
2014/7	16	1	1	3	1				第16回大会
2015/1	16	2						1	
合計			6	10	5	6	1	7	

## 在宅医療の研究の現状

### ①日本在宅医学会雑誌に掲載された論文

2000年1月に日本在宅医学会の学術雑誌である日本在宅医学会雑誌の第1巻第1号が発行された。2015年7月には第17巻第1号が発行されている。このうち第11巻第1号（2009年7月）から第16巻第2号（2015年1月）までの6年間に掲載された論文の概要を表1に示す。いずれの巻も第1号は大会の報告で構成されている。この間の原著論文数は6編、報告10編、短報5編、症例報告6編、総説1編、特集7編であった。それぞれの巻の第2号では特集が組まれ、テーマごとに編集されている。残念ながら原著論文を始めとする研究論文の数は少数にとどまっている。また、症例が蓄積されることにより在宅医療での診療・ケアの共有化が期待されるものの、症例報告もまだ少ない状態にある。今日ではインターネットの普及により情報交換が容易になっているとは言え、学術的な情報については積極的に学会誌に投稿し、質が担保された状態で共有されることが望まれる。

### ②日本在宅医学会大会の演題

2015年4月25日（土）および26日（日）に開催された第17回日本在宅医学会もりおか大会では256題のポスター発表があった。演題の内容を研究の種類（図1）および研究のテーマ（図2）により分類した。

研究の種類についてみると、最も多かったのは実践報告などの95題であり、実態調査77題、症例報告46題、アンケート調査32題、後ろ向き研究などが6題であった。在宅診療、ケアの現場からの報告や実践に関する発表が多いことが判明した。一方、研究のテーマごとにみると在宅診療・ケアの取り組み内容およびシステムに関する発表が最多で、非がん、多職種連携、終末期・看取り、治療・ケアの方法などが続いた。診療・ケアの実践に関する内容に加え、疾患や在宅医療のステージ、多職種連携のほか、幅広い分野について発表されていることがわかる。今後、研究計画を立案して研究に取り組むことを奨励するとともに、実践報告、実態調査、症例報告が共有され、多施設共同研究に発展することができれば、現状把握、課題の見出しにつながる可能性がある。

## 研究マインドの醸成および研究への取り組みの奨励

①会員に対する「在宅医療に関する英文論文」の紹介  
研究マインドの醸成を目指し、2014年10月から毎月1～2編ずつ在宅医療に関する英文論文を日本在宅医学会会員向けに配信している。配信に際しては東京大学医学部在宅医療学拠点の抄読会で取りあげた論文のなかから在宅医療の診療・ケアに従事する方々の参考になりそうな論文を紹介するよう心がけている。在

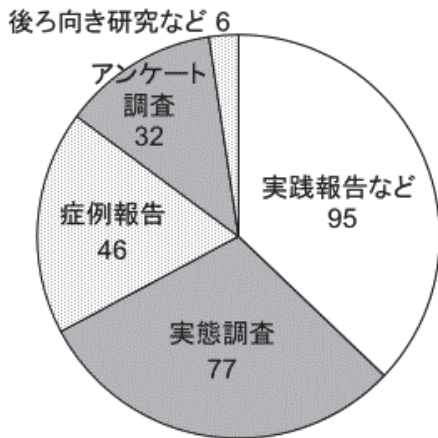


図1 第17回日本在宅医学会もりおか大会（2015年4月25日（土）・26日（日））研究の種類別演題数の内訳（全演題数 256 題）

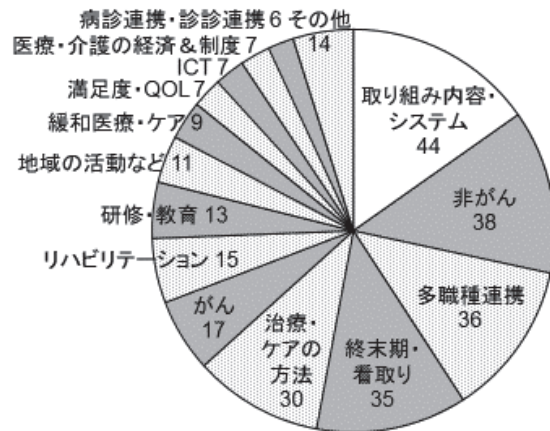


図2 第17回日本在宅医学会もりおか大会（2015年4月25日（土）・26日（日））研究の内容別演題数の内訳（全演題数 256 題）

在宅医療に関する英文論文は医学の他分野と比べ多いとは言えないものの、このように文献検索、抄読を続けていると、ある程度のエビデンスは築かれつつあることが実感される。我が国を含めアジア諸国からの論文が増えている。高い医学水準を達成した我が国では急速な高齢化が進行しており、生活の場で治し支える医療としての在宅医療が果たす役割は高まっている。日本在宅医学会会員を中心に在宅医療に対して積極的に取り組んできたこれまでの経験、実績をふまえ、在宅医療分野の情報収集に努めながら積極的に研究成果を発信することが期待される。

本取り組みを継続することにより、今後、一方的な情報提供ではなく、会員同士が在宅医療に関する興味深い論文や情報を積極的に紹介しあうようになることを期待している。

## ②日本在宅医学会大会における「研究ワークショップ」の開催

第17回日本在宅医学会もりおか大会のなかで「在宅医療における研究の振興に向けてのワークショップ—現場でのふとした疑問や課題：そこが研究の出発点—」を開催した。在宅医療に関する研究への取り組み、課題について2名の講師が講演した後、グループワークを開催し、話し合った内容を発表する内容であった。グループワークではファシリテーターによる

進行のもと、以下の3点について議論された。①これまで実際に研究を行った経験があるか？あれば研究をうまく行うことができたか？②今までの臨床経験のなかで感じたりサーチ・クエスチョン、③当日の講演を聞いて、これから実際に研究をしようとしたらこういう工夫をしたらよいと思ったこと、今後研究を行うにあたってのアイデアがあるか？詳細は省略するが、上記②、③について議論された項目を表2、表3に示す。在宅医療の現場で様々な課題を抱えている様子がうかがわれる。今後も同様のワークショップを開催することにより、研究課題の抽出、共有を図り、共通の関心を持つグループを形成し、共同研究につなげることを目指している。

## 研究を発展させる基盤作りおよび多施設共同研究への展開に向けた活動

①日本在宅医学会大会演題からの研究シーズの見出し  
単一の施設で研究を行う場合、しばしば対象者の偏り、十分な対象者数を確保することが困難であるという課題に直面する。在宅医療に関する研究シーズを見出し、研究への展開、ならびに共同研究に発展させるための基盤作りを図るため、日本在宅医学会研究委員会は第17回日本在宅医学会もりおか大会のポスター演題をモニタリングした。その結果、興味深いテーマ

表2 今までの臨床経験のなかで感じたりサーチ・クエスチョンとして議論された主な項目

- 症状緩和・末期医療・看取り
- 在宅と病院・施設との違い
- 薬剤
- ケアの評価
- 認知症
- 診療所
- 訪問看護ステーション
- 検査
- 治療
- 医療機器の管理
- コスト
- その他

が多く認められた。しかし研究手法が十分吟味されていないものが多く、現時点で共同研究に発展させることは難しいのが現状である。それぞれの研究をブラッシュアップすることにより質を高めることが期待される。今後、吟味された研究手法に基づく発表が増えるようになれば、同じ領域に関心を持つ会員同士で多施設共同研究を展開することが可能になると考えられる。次回以降の大会でも演題のモニタリングを継続しながら、並行して研究を奨励するプログラムを展開することにより、多施設共同研究を実施することができる下地作りに努めることを計画している。

## ②在宅医療のデータベース構築に向けた合同委員会の開催

在宅医療のデータベース構築に向けた議論を行うため、2014年9月5日（金）日本老年医学会在宅医療委員会と日本在宅医学会研究委員会が合同委員会を開催した。そこでは以下のような議論が行われた。

研究の意義として在宅医療の質を評価する研究、診療の質の平準化を図るための研究が必要であること。ケアマネジャー・看護師と医師からのデータ収集では内容が異なり、診療データの収集に意義があること。

研究の方法として、研究の種類として浅いけれども数を集める研究、共通ツールを作成し信頼できるデータを深く集める研究にわかれること。調査項目として、リサーチクエスチョンに対する必要項目を定め、最低

表3 本日の講演を聞いて、これから実際に研究をするとしたらこういう工夫をしたらよいと思ったこと、今後研究を行うにあたってのアイデアがあるか？

- 仲間を募ることが重要
- 問題を研究に進めるのが難しい
- 独りよがりになり研究が頓挫する
- 顔の見える関係を構築することにより発展的にアイデアが出る。コミュニケーションが大切。

限の調査項目にとどめるべきであること。診療所間で使用する尺度が異なり、共通した尺度を使用するデータシートを作成する必要があること。QOLについては量的な研究と質的な研究の両方が有用であること。データ収集の期間・頻度について、調査期間を設定すべきであること。どの程度のデータを収集するのかを定めること、頻度も問題になること。有用と考えられる研究方法として、介護保険の訪問調査、レセプトデータ、死亡小票などを組み合わせた研究が有用であると考えられること。多施設共同研究の可能性について、将来、日本在宅医学会の会員に対して広く浅くながかけてみてもよいと思われること、横断調査を行ってもよいと考えられること。学会から研究について通知し、希望者を募ってエントリーする方法が有用ではないか。

研究上の留意点として、データ入力精度に注意し、収集データの正確さを見極める必要があること。臨床現場での研究では現場に負担がかかるため、診療所でのデータ収集は6カ月程度かもしれないと思われること。研究上の課題として、医師に対する研究マインドの醸成に努め、研究レベルの底上げを図ることが必要であること。データベース構築、データ管理に費用を要すること。

研究の実例として緩和ケア領域の研究が紹介された。

このような議論をふまえ、我が国の在宅医療の実態を把握し、質の向上を図るため、在宅医療のデータベース構築に向けた準備を進めていく必要がある。

## 在宅医療の研究課題

在宅医療の研究課題として様々な事項が考えられるが、主要な課題として以下のような研究を挙げることができる。

### ①在宅医療の特徴をふまえた研究

在宅医療は生活を支える医療であり、多職種連携に基づきサービスが提供される特徴がある。このような在宅医療の特徴をふまえた研究、学際的な研究に取り組むことが望まれる。なお、在宅医療のあり方は医学的観点に加え、社会状況、医療・介護の政策・制度などにより変化する。これらを包含し、在宅医療の実態を把握し、課題を明確にするための調査研究も大切である。

### ②在宅医療と外来・入院医療との比較

診断、治療、ケアの方法は外来診療、入院診療での対応と共通することが多いものの、療養環境の違いを考慮して対応方法を変える必要があることも経験される。食事摂取の状況や栄養状態、せん妄の頻度は病院と在宅では異なることが予想されるなど、療養場所による違いも考えられる。入院治療と在宅医療の間で症状、生活機能、QOL、患者満足度などを比較検証することにより、在宅医療の適応と有用性を明らかにすることができる可能性がある。

### ③在宅医療での治療方法の検討

海外では慢性呼吸不全の急性増悪<sup>1)</sup>、慢性心不全の急性増悪<sup>2)</sup>などに対する治療を在宅医療の場で行うHospital at Homeモデルに関する研究が行われている。このように在宅医療の場で治療する方法を確立することに努める研究も課題として挙げることができる。

### ④在宅医療の質の検証

医療の質を構造、過程、結果の側面から評価することができるとするドナベディアン<sup>3)</sup>のモデルに基づき、在宅医療の質を評価する研究も大切である。在宅医療ではいきがい、生活機能、苦痛の緩和、患者満足度、

生活の質を主な結果（アウトカム）とする研究が求められる。さらには疾患の治癒など単一の指標ではなく、個別の価値観を考慮した複合的なアウトカムを設定した研究も大切であると考えられる。

著者のCOI（Conflict of Interest）開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし

## 文献

- 1) Aimonino Ricauda N, Tibaldi V, Leff B, Scarafioti C, Marinello R, Zancocchi M, et al.: Substitutive "hospital at home" versus inpatient care for elderly patients with exacerbations of chronic obstructive pulmonary disease: a prospective randomized, controlled trial. *J Am Geriatr Soc* 2008; 56 (3): 493-500.
- 2) Tibaldi V, Isaia G, Scarafioti C, Gariglio F, Zancocchi M, Bo M, et al.: Hospital at home for elderly patients with acute decompensation of chronic heart failure: a prospective randomized controlled trial. *Arch Intern Med* 2009; 169 (17): 1569-1575.
- 3) Donabedian A: Evaluating the quality of medical care. 1966. *Milbank Q* 2005; 83 (4): 691-729.

## 理解を深める問題

### 問題 1

医療の質を評価することができる側面としてドナベディアンが提唱したものを3つ選べ。

- a 構造
- b 診断
- c 過程
- d 原因
- e 結果

### 問題 2

在宅医療の研究課題としてふさわしいものを3つ選べ。

- a 多職種連携に基づくサービス提供と患者満足度の変化
- b 抗不整脈薬の種類の違いによる心不全の予後に関する検討
- c 入院患者と在宅療養者におけるせん妄の頻度の比較
- d 施設入所者と在宅療養者における生活機能の経時的変化の比較
- e 悪性腫瘍に対する新規化学療法の有効性

### 問題 3

在宅医療に関する研究の意義として正しいものを3つ選べ。

- a 在宅医療の質の向上
- b 在宅医療での診療方法の標準化
- c 悪性腫瘍患者の生存率向上
- d 医療・介護政策の決定
- e 認知症治療薬の開発